

平成27年度 中学部 美術グループ

チーフ：小此木 彩

発表者：辻、村松、西山

1 グループテーマ

『美術の授業における理解支援と合理的配慮』

2 テーマ設定の理由

これまでの中学部の美術では、手順を理解し、道具を活用することに重点が置かれがちで「美術」の特徴を明確に示すことが難しい実状が見られた。授業のUD化理解支援と合理的配慮を工夫することで生徒が自ら感性を発揮し、主体的に制作活動に取り組む授業の実現を目指し、研究することにした。

3 グループの重点的取り組み内容

生徒の参加をいっそう促進し、驚きや感動を通じて授業のねらいが解ることを企図して、次の2点を中心に各学年から出された指導案を縦割りで学年を越えて検討し、授業の改善を繰り返し、グループ内で吟味、実践、検証を積み重ねた。

- ①生徒が「描きたい」「つくりたい」と思えるような魅力ある題材の選定。
- ②学年生徒の実態に即した授業の展開や制作方法。

4 研究の方法及び経過

<方法>

- ①美術担当が取り上げる授業を考え、その後各学年の美術担当・チーフでその授業が今回の研究の題材に適しているのか意見交換
- ②授業の指導案提出
- ③指導案を参考にその授業で対象となる生徒決め
- ④その生徒が授業でつまづく点を考え、合理的配慮を話し合う
- ⑤授業のビデオ撮影
- ⑥ビデオを見ながら協議
- ⑦UD化・対象生徒の合理的配慮の観点から授業改善を行う

<経過>

- 6月：テーマ、研究方法の検討
7月～8月：指導案提出・対象生徒決め
9月～10月：対象授業のビデオ上映、協議、改善
11月：今回の研究を受けてのまとめ・今後の課題を協議
12月：まとめをもとに紀要の作成
1月：まとめをもとに振り返り・考察

5 研究の実際

【1学年の取り組み】

1) 授業構成について

①題材名について『ひかりの鉛筆』



「ひかりの鉛筆」という技法について：懐中電灯を使って空中に絵を描き、それをカメラのスローシャッタースピードモードで撮影すると、撮影中に動いた軌跡が写真に残る。「ひかりの鉛筆」は、ペンや絵の具などで紙に描画する場合と異なり、制作途中の作品を自分で確認できないところに不思議さや面白さがある。それが作品を作るときに「一体どんな絵ができるのだろうか？」という期待感を生み、制作や完成作品への注目度を高められるのではないかと考えた。また、撮影中の描線が見えないことから、自分の思い描いていたイメージと完成作品とのギャップが出やすく、自分の伝えたいイメージについて深く考え、試行錯誤しながら作品と向き合う機会を作ることができるのではないかと考えた。

学年集団の特徴：自分の表したいイメージをはっきり持っており、発想や表現力が豊かである。一方、友人の意見を聞いたり、尊重しながら一緒に活動したりするという点については課題が見られる。こうした実態をふまえ、一枚の写真作品というイメージを介して友人の意見を聞くことや、自分の思ったことや感じたことを提案したり共有したりする場面を作りたいと思い、学年を3つの小グループに分け、友人と相談しながら制作する場面を設定した。

②焦点化のポイントについて

美術において「創造活動の喜び」とは「活動の主体者の内面に重点を置いた活動を展開する中で、『新しいものをつくりだしたいという意欲』と『それを実現するための資質や能力』が調和よく働いたときに豊かに味わうことができるようになるものである。」とある。¹

本題材では、この「創造活動の喜び」が発揮されるよう、授業を大きく3つのパートに分け、段階的に学習活動を進めた。活動内容は以下のとおり。

① 技法を習得する時間

② モチーフ（描く対象）について知り、発想を膨らませる時間

③ 作りたい作品について友人とイメージを共有し、相談しながら表現へつなげる時間

①→懐中電灯の大きさ、色、撮影距離、ライトを動かす速度などについて「ひかりの鉛筆」で最低限必要な技法を身に付けられるよう、「とおいとちかい」「はやいとゆっくり」など1時間につき1つの技法に限定し、動作模倣やお試し撮影を繰り返す中で技法を身に付けていくようにした。

②→「ひかりの鉛筆」の技法を使って表現したいという意欲を持たせるために、生徒にとって身近で描きやすいと思われるテーマ（モチーフ）を精選し、動画や教員が描いた写真作品を呈示することで、対象への興味を持たせようとした。モチーフは線描と点描で描けそうな雷、花火、宇宙の3つに絞り、そこから描きたいテーマを生徒に選ばせた。

¹中学校学習指導要領 美術 p.7

③→学年を3つの小集団に分け、各グループにキャプテン役とサブ役を設けた。キャプテンは作戦会議の司会を担当し、必要なライトを友人のために選んだり、イメージに合う身体の動かし方を友人に伝えたりした。また、教員の中でもキャプテン役の司会を補佐する教員と、その他の生徒をサポートする教員とに役割を分け、相談活動が円滑に進むようにした。



←各々の生徒が作りたい作品についてイメージを共有できるように、相談ボードとカラーペンを用意し、アイデアスケッチをしながら相談し合えるようにした。

○導入部分（つかむ・見通す）

導入時に活動内容を記した絵カードを呈示し、活動の流れを見通せるようにした。また、生徒が入室する前に、予め授業に関連した動画やBGMを流し、活動への期待感をもたせた。

○展開Ⅰ（考える・気付く）

教員が描いた作品や、前時に皆で撮影した作品を呈示し、どうやって描いたか、より良い作品にするためにはどうしたらよいかなどのクイズを出し、技法や身体の動かし方について試行錯誤しながら制作を進められるようにした。



←教員が描いた「雷」
これを見本に、グループで
相談し共同制作を行った。

○展開Ⅱ（深める・広げる）

チームで相談した結果をもとにお試し撮影を行い、テレビ画面やiPad画面で確認することで自分たちの考えたイメージを確認できるようにした。このお試し作品をもとに、さらにグループ内で相談を重ねていくことで、本番の撮影会までに試行錯誤しながら制作できるようにした。

○まとめ（ふりかえる）

本番で撮影した作品を前に、工夫して表現した点や、誰がどの部分を担当したかなどの解説をキャプテン役の生徒に代表して発表してもらい、本時の活動を振り返った。発言内容を踏まえ、教員が補足説明や肯定的なコメントを返すことで本時の活動を評価した。

④授業構成を工夫した成果と課題

本学年にとって友人と相談して活動する試みは初めてであり、はじめは教員が、司会や適切なライトの選び方などを伝えていた。しかし授業回数を重ねていくうちに、道具の使

い方や表現方法、活動の流れなどを理解し始め、全員が作品制作に主体的に参加できるようになった。特にキャプテン役の生徒は、自己肯定感が高められたのか、今回の授業をきっかけに、授業外でもリーダーシップを取って号令をかけたり、友人を助けたり励ましたりする場面が見られるようになってきた。今後の課題としては、美術の授業以外でも友人同士で学び合ったり助け合ったりできるよう、相談や協力が必要な場面を様々な学習活動の中で設定し、習得した力を応用していくことや、自分が表現したいイメージを適切に具体化できるよう、必要な技法や表現方法を適宜教えていく必要があると思われる。

2) 対象生徒について

生徒の実態	
<ul style="list-style-type: none"> ・「ひかりの鉛筆」というタイトルの「鉛筆」から「文字を書く」というイメージを持ったのか、友達の名前を書きたがった。「ゆっくり書く」という活動であったが、教員の指示よりも自分のやりたいことを優先して自分のペースで文字を書こうとしていた。しかしうまく書けずに困惑していた。 ・集団のリーダーとしての経験が少ないため、話し合いを進行したり、友人の意見を引き出したりすることが難しい。 	
合理的配慮	変容
<p>『技法を習得するための合理的配慮』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の前に取り出しで補充指導を行い、文字を書く練習をした。 ・授業の前に補充指導を行い、どんな絵を描きたいかアイデアスケッチを描いた。 ・グループに分かれてテーマに沿った絵を描く活動のときは、撮影場所の近くで話し合いを行い、他のグループが撮影しているところを見られるようにした。 ・撮影前にライトの動かし方を練習するように言葉かけを行った。また、友だちに動かし方のアドバイスをするようにも言葉かけをした。 <p>『リーダー実践のための合理的配慮』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員がリーダーの見本として、対象生徒にイメージを実現するための技法や友人への提案方法を呈示する。 	<p>『技法の変容』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うまく書くことができると満足して、その後の授業中は教員の指示の通りに活動することができた。 ・事前に絵を描くことで具体的にイメージすることができた。 ・他グループの撮影を見て、「こうだよ！これが描きたいんだ！」とアイデアをもらっていた。 ・撮影をしているグループの邪魔にならないよう、また光が見えるように壁に向かって光を当てて絵を描く練習をした。友だちに対しても同じような方法でアドバイスをしていた。そうすることで実際に撮影をするときにアイデアスケッチと同じような絵を描くことができた。 <p>『リーダーとしての変容』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員の見本に注目させることで、リーダーとして友人に技法を提案したり、適切なライトを選んだりするなど一緒に制作する

<p>・話し合いに友人が参加できるように、作戦ボードの活用方法を補充授業で伝えるようにする。</p>	<p>意欲が見られるようになった。</p> <p>・作戦ボードにより、発語の無い友人も意思表示をすることができ、話し合いに参加する場面が見られるようになった。それによりリーダーとして、グループ全員に関われるようになってきた。</p>
--	--

◎まとめと今後の課題

本生徒にとって制作意欲をかきたてる題材だったので技術の習得がとてもスムーズだった。また、他者の作品からアイデアを受けて制作の幅を広げることも課題であったため、環境設定をすることでそれについても達成できたのではないかと思う。そして、グループでイメージを共有し作品を完成するために、リーダーとして他の生徒と積極的に関わる機会ができたことで、いままでに見られなかった友人との関わりが見られるようになった。

今後は、魅力的な題材を設定し、様々な技法を習得でき、より自分の描きたいイメージに近い作品づくりをしていくことや、美術の授業時間だけではなく、リーダーとして友人と共に様々な活動に取り組む場面が増えるようにしていきたい。

【2学年の取り組み】

1) 授業構成について

①題材名について『花火』

本学年は、模倣が得意な生徒が多くいる反面、自分で工夫・創造していく個の力を更に引き出していくことが課題になっている。夏休みが開けて、季節的にも合う題材を考えた。生徒にとって身近で親しみがあり、複数の中から『自分で選ぶ』ことができるもので「花火」を考えた。どの生徒も参加しやすく線で描きやすい活動が出来る事などから決定した。

②焦点化のポイント

- ・色々な線を描いてみる時間
- ・いくつかの技法を経験する時間
- ・友達の作品を見てからもう一度活動する時間
- ・「ひゅーどん！」と言って発表する機会を作る

③UD化した授業の展開構造について

○導入部分

美術室に入る時には、BGMとして花火の効果音を流して、授業への期待感、イメージが付きやすいようにした。本時の授業の流れを絵カードと文字で呈示し、見通しを持って参加できるようにし、今はどの場面なのか矢印マークを絵カード上に置いた。

また、前時の授業の作品を側面の壁に掲示するなどして、前時の振り返りが出来るようにした。

※20名が美術室で教員の説明や映像が見やすいように、導入時点では椅子やテーブルは使わずクラスごとに座った。

○展開Ⅰ（考える・気付く）各テーブルでSTと絵カードを見ながら線を描く練習や、「さっさ」「ぎゅー」などの声かけでわかり易くした。どんな花火を描いてみたいか、描きたい花火の写真の所に写真カードを置いた。自分がイメージする花火をまず、描いてみる。途中、友達作品を見て回る時間で、花火の描き方には色々な色を使うことや、描き方があることをSTの助言で気が付く生徒もいた。回数を重ねていくと、自分で「ひゅーどん！」と言いながら花火を描いている生徒もいた。

○展開Ⅱ（深める・広げる）

友達作品で良かったところや、次はこうしてみたいなど、思い思いに後半の活動に取り組んだ。作品を鑑賞し合ったり、自分の作品を見直したりする時間を設定したことで、色や道具を変えるなどの工夫をして「花火」を描いている生徒も見られた。



○まとめ（ふりかえる）

発表では、各自描いた「花火」を一つ選び「ひゅーどん！」と言って、黒い模造紙（夜空）に貼っていく場面を設定した。全員の花火が打ちあがり、様々な花火があることを知ることができた。

④授業構成を工夫した成果と課題

美術室に入って来る時から、BGMを流したりすることで授業への期待感を持てるようにした。活動中にもBGMを使って「花火」をイメージしやすいようにしてみた。活動中にBGMを使うのは初めてだったが、集中が途切れることなく活動が出来ていたように思う。

色々な線を描いてみる時間を最初の授業で設定したり、線カードを用意したことで、スムーズに活動でき、個人でイメージした「花火」を描く際の手立てとして使われていた。また、これまでの授業では活動のまとめとして、最後に発表の時間を設定し、友達作品を見る機会になっていた。今回、活動の途中に友達作品を見て回る時間を設定した。

「次はこうしてみよう」と工夫する生徒が見られ、今までにない取り組みになった。反面、集中が途切れてしまう生徒もいたため、活動の今後の課題となってくる。発表の仕方、自分自身で「ひゅーどん！」と言って発表する（花火を打ち上げる）ことで楽しく参加できていた。

今後、他の題材や他教科でも自分で工夫していける場面があるなど、個の力（一人ひとりのステップアップ）を引き出して授業を考えることが課題になって来る。

2) 対象生徒について

生徒の実態	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学部2年生男子生徒 ・ 「花火」という題材を伝えずに、花火の打ち上げの音を聞いたり映像を見たりすることで「花火」と答えられ、題材を知ることができた。使用する道具の選択や、描きたい花火の選択をする際にやや自信が持てない様子も見られた。また、不器用なところがあり、上手く書けないと「んー」と悩んだ様子もあった。柄付きタワシの持ち方は、鉛筆を持つように持ち、上から下に手を動かして線を描いたり、友達の書いた花火を見て「すごいね」「これきれいだよ」と良い所を感じ取り表現したりすることができていた。 	
合理的配慮	変容
<ul style="list-style-type: none"> ・ 道具や花火を選択する際は、選択する順番を後方にして友達の様子を見られるようにする。 ・ 本紙を使用する前に花火を描くのに必要な線を見やすい様に一覧にしたものを提示し、同じ機の教員や友達と一緒に練習する。 ・ 紙が動かないように教員が押える。 ・ 生徒が興味を持った友達の作品を見本に花火の描き方を伝えて生徒が参考にできるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達が先に選ぶ様子を見ることで選択方法が分かったり、選択肢が減ったりすることで強ばりがちだった表情が緩み自信を持って選択できていた。 ・ できないことに対しての苦手意識が強く、「んー」と悩んだ様子が見えたが友達と一緒に線の特徴を捉えた言葉を添えて練習すると本紙に描く際に「さっさっ」「まる」等言いながら描けていた。 ・ 2種類伝えた。柄付きタワシのタワシ部分を「ひゅーどん」と言いながら跡を付ける方法は生徒が取り組みたいと思えたのか生徒の絵に反映されていた。

◎まとめと今後の課題

- ・ BGM や写真、これまでの経験、発表を毎回の授業で重ねることで花火のイメージを持って取り組むことができていた。
- ・ 今後の課題として、生徒は自信が持てることで取り掛かりがスムーズになるため、授業の導入を生徒が経験したことある題材を使用したり、興味を持つようなテーマの設定をしていく。また、本人の主体性を十分に引き出すためにどの程度合理的配慮を行うのか考えていく。

【3学年の取り組み】

1) 授業構成について

①題材名について『光の箱』

本学年の生徒は、見る活動が得意な生徒、周囲の環境の変化に注目し気付くことができる生徒が多くいるが、色への注目度はそれほど高くない。しかし「色」は日常生活の中で必ず目にするものであり、時には何かを判断する際の手掛かりになったりもする。「光の箱」はセロハン（色）を重ねていくことで新たな色ができたり、光を当てることで色の見え方が変わったりするため、本単元を通して日常生活の中でもっと色に注目してほしい、関心を持ってほしいと思い、この題材を選んだ。

②焦点化のポイントについて

本単元では色の変化に気が付くことをねらいとして、色（セロハン）と光を使って授業を行った。色の変化がわかりやすくするために使用する色は赤、青、黄色の三色に限定し、セロハンを貼った板の後ろから光を当てることで、色の重なりや変化がわかりやすいようにした。

③UD化した授業の展開構造について

○導入部分（つかむ・見通す）

制作活動に取り組む前に、黄色いセロハンに赤、青、黄のセロハンが重なっては通り過ぎていく動画を見せることで、1つの色に違う色が重なると色が変わることに注目しやすいうようにした。また制作するものをイメージしやすくするために、制作手順の説明の時には、生徒の前で代表生徒と一緒に実際に作品を作り制作の工程を見せた。

○展開Ⅰ（考える・気付く）

全体作品の制作では、制作の途中で教室を暗くして生徒の洋服や教室の壁、天井に映し出して身体全体で色を感じ、見ることで、自分たちが貼ったセロハンがどのような色になっているのかを確認した。個人作品の制作では、セロハンを貼る際の最初の2回は前に立つ教員の声に合わせて貼り、次の工程に進むまでの間隔を広くすることで色の選択、貼り方、貼る場所を考える時間を確保し、自分の作品に注目することができるようにした。

○展開Ⅱ（深める・広げる）

全体作品の制作では、箱に銀の筒を詰める、トレーシングペーパーの蓋を閉める活動をした。その活動の中で、セロハンを貼った箱の中に銀色の筒を詰めることで見え方が変化したことやトレーシングペーパーの蓋を閉めたことでさらに色が変わったことの発見をした生徒がいた。個人作品の制作では、展開Ⅰの後は生徒が自由にセロハンを貼り、教員の声に合わせて銀の筒を詰め、蓋をし、完成した人から光る台の上で作品の鑑賞をした。展開Ⅰで考える時間を確保したことで色の選択に個性が出たり、セロハンを全体に満遍なく貼る生徒が出てきた。

箱に銀色の筒を詰めている様子→



○まとめ（ふりかえる）

全体作品の制作では、完成した大きな「光の箱」を箱の真正面に座って近くで見たり、壁に映し出したりして鑑賞した。個人作品の制作では、完成した個々の箱を前の長机に生徒が並べて、部屋を暗くした状態でヒーリングミュージックに合わせて順番に光を当てていき、自分の作品や友だちの作品を鑑賞した。「あっ」と言って指をさしたり、色の名前を言ったりして見えた色や光の当たり方による色の変化に注目する生徒が多かった。



↑光の箱の授業後、スタンドグラスを作ったところ、服に映った色にも注目するようになった。

④授業構成を工夫した成果と課題

今回の単元は、年度当初は万華鏡を予定していたが、学年、学部の教員からの助言や話し合いの中で生徒の実態と授業内容がずれていることに気が付き、「色の変化に注目する」という単元のねらいは変えずに題材や授業構成を変えることで生徒に沿った授業に変更した。変更したことにより、本学年の生徒の強みである「見る力」を発揮しやすい授業になったと感じている。

また本単元の第1回から第4回のそれぞれの授業においては「色の変化」を軸にして、導入でセロハンが重なって色が変化する動画を見せたり、展開ⅠとⅡの間で暗い部屋で箱に貼ったセロハンの色を壁や天井、生徒の洋服に映し出したり、制作時に光の台を使って作ることで鑑賞しながら制作をしたり、といったように方法を変えて何度も何度も「色」へのアプローチを行ったことで、ねらいや制作物は同じであっても色の変化への気付きや色への注目度が良くなったように感じた。

今回の研究を通して、生徒の実態に合わせて題材や内容を作り替えていくことと、違う内容であってもねらいが同じ授業を繰り返し行い、学習を積み重ねることが重要であることがわかった。今後も生徒の実態に合わせて、適宜授業の修正、改善を行っていくこと、一つのねらいを継続して学習することを意識して授業構成を行っていきたい。

2) 対象生徒について

生徒の実態	
<p>3年生の男子生徒。</p> <p>常に周囲に目を配り、自分との関係性や距離感を気に掛けている。そのため周囲に対する気遣いができる一方で、気疲れしやすく行動が不安定になることがある。</p> <p>また、いろいろな事に興味をもち、活動に取り組む意欲も旺盛である。しかしその一方で、右半身の若干の麻痺のため手先の器用さに難があり、自分はいまうまくできないのではという不安感をもっていて、意欲と不安感の間で葛藤しながら取り組んでいる。そのため、うまくできた経験のある活動や自信のある活動には積極的に取り組み、自己肯定感を得てその他の活動にも良い影響を与えることも多いが、苦手意識が先行すると、活動に対して逃避的、否定的な行動にでることや教員に対して不適切な関わり方をすることもある。</p>	
合理的配慮	変容
<ul style="list-style-type: none"> ・第一回目の授業において、言葉かけで手本の演示を行う意欲を引き出し、教員と共に他の生徒の前で活動する機会を設けて、作業の経験を得ておくことと、全体の前で賞賛を浴び意欲を維持することを狙う。 ・ひとりずつ順番に取り組む第二回目の共同制作の場面では、他の生徒の活動を参考にでき、且つ疲れが出ていない、はじめのほうの順番で活動を行う。 ・色の合成を映像で観てイメージを作り上げる三回目の授業では、本人の体調や気持ちに共感する言葉かけを行い集中力の維持を図る。 ・小パーツを個人制作し、集めて全体の大きな作品を作る四回目では、よき手本となる友達とのペアで活動を行い、意欲と集中力の維持、継続を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初めての内容であったが、手本演示後の個人制作でも意欲的に取り組み、逃避的、不適切な行動が見られなかった。しかし後半は疲れが見え不安定になった。 ・他の生徒の前でも臆することなく自ら進んで制作に取り組んだが、完成後の鑑賞では集中力を欠いていた。 ・自分の身体や天井に色が映し出される場面では「おおっ」という反応をしていたが、全体としては継続的な集中力の維持が難しかった。 ・友達と教員の関わりを観て方法を理解し、望ましい行動で個人（小パーツ）制作を行った。全体作品完成後の鑑賞でも、友達の反応に良い影響を受けていた。

◎まとめと今後の課題

事前に学習内容に慣れておくことや、言葉かけを工夫する等で、不安な気持ちや疲れに打ち勝ち、本生徒なりの好ましい行動につなげることがある程度できた。しかし、1時間の授業を通して、継続して集中力や意欲を維持することが難しい場面も見られた。今後は緊張とリラックスの均衡がとれた、本人にとっての適正な授業の「メリハリ」を模索していきたい。

6 まとめと今後の課題

(1) まとめ

今回の研究の成果として、①魅力的な題材を設定できたことと、②ねらいを焦点化できたことの2つが達成された。1つ目の「魅力的な題材づくり」については、学年にとどまらず学部間で授業見学を繰り返し行い、よりよい授業づくりのために意見を出し合ったことで、各学年の実態に即した題材や教材を検討することができた。それにより生徒自らが主体的に感性を發揮し、制作する場面が多くみられるようになった。

2つ目の「ねらいの焦点化」については、従来の美術の授業において、手順を理解することや、適切な道具の使い方、あるいは「スパッタリング」「マーブリング」などといったような、どちらかという技法の習得に重きが置かれがちで、美術科という教科が大切にしている感性や情操の育成についてはあまり検討されることがなかった点を踏まえ、「何を(テーマ・モチーフ)」「どう描く・作るのか(技法)」という二つの視点を授業のねらいに取り入れた。

そのうえで授業内容や構成、教材の呈示方法などを検討しあうことで、教員のものの見方や発想が柔軟になり、より各学年の実態に合った授業づくりを実現することができた。

特に大きな成果としては、授業づくりにあたって教員の先入観が和らいだ点にある。研究当初は、認知能力に課題を持つ生徒が多い中で、「イメージを持つ」「テーマを感じ取る」といった表現活動に必要な土台を作ること自体がそもそも不可能なのではないかという懸念が持たれたこともあった。しかし、実践を通して1時間の授業におけるねらいを明確にし、呈示方法やモチーフ選びを工夫できれば、ほとんどの生徒が教員の伝えたい意図やイメージを感じ取ることができるということが分かった。

(2) 今後の課題

今後の課題としては、美術科という教科にとどまらず、本研究での取り組みを他教科や生活全般の中に広げていくことがあげられる。限定された場面でのみ發揮されるものではなく、環境や時間が変わっても活用できる力をつけるために、今回の取り組みによって得た知識や能力をそのほかの場面で活かせるよう、経験の幅を広げていけるようにしたい。ⁱⁱ

そして生徒と同じく、教員も感性を磨き柔軟な発想を持つようにしていきたい。授業検討を繰り返す中で「作品とはこうあるべきだ」「道具の使い方はこのようではなくてはいけない」といった無意識の制約が、生徒の表現や作品の幅を狭めているように思われた。「こうでなくてはいいけない」という考え方から「これもあり」という柔らかい見方で、生徒の発信や表現を受けとめていきたい。

ⁱ 第1学年については「雷・花火・雨・宇宙(テーマ)」を「ひかりの鉛筆(技法)」で描く。第2学年については「花火(テーマ)」を「ひっかき絵・絵具・クレヨン(技法)」で描く。第3学年については「色の重なりや変化(テーマ)」を「カラーセロファンで色の重なりを表現した動画を見る、天井や室内、生徒の衣服にセロファンの光を投影させたり、光の台を使用し鑑賞しながら制作をしたりする。(技法)」活動で行った。

ⁱⁱ 「ひかりの鉛筆」で、グループリーダーを中心として生徒同士の関わりの中から共同作品を制作したことをきっかけに、宿泊学習や教室移動などの場面で、リーダーがリーダー性を發揮した子ども同士の関わり合いが増えてきた。